

其の勇ましい進歩を見て、今の所謂大家連中も大家の名に安んぜずして『なに若い者なんかに敗けるものかと云ふ位いに、うんとへビーを出して奮つて研究して貰いたい』と思つた。霞生

### 畫趣に富みたる淺間社

在清水 清 茂 生

静岡市へは清水港より、鐵路十錢行程三里です。市の風致は駿府城趾、安倍川、及び淺間社です。けれども其隨一は、淺間社でせう。日光を見ざれば、結構といはれずといゝますけれど僕は實際見て、却て失望しました、これは人々のいゝふらしのえらい割合に、社殿も狭小に、且つ色もあまり、華麗ではなかつたからです。

僕は、今迄參拜した社の中で、此社ぐらい、何かと畫味の調ふて居るものは、先づないです。第一心地よいのは、境内の狭くるしくないことです。老樹の多いことです。背後に古杉鬱蒼たる山を負ふて居ることです。第二に社殿の壯大なことです、建築物の数の多いことです。第三に社殿の丹精其他が、古雅蒼然たることです。一たび足を此地に入れば、神韻先づ人を襲ひます。

社は今より一千餘年前、聖武帝の御宇の創立とやらです。今の社殿は、徳川中葉以後の建立です。社格は國幣中社、三面繞らすに、青苔紫蘚斑々たる、石の玉垣を以てします。他の一面は、即ち森々たる山なのです。先づ石の大鳥居を入ると、石造

下馬橋があります。それを渡つて、丹塗銅瓦の二王門（維新の際二王だけは佛なればとて他へ移されました）があります。それから敷石の上を通つて行くと、群鳩の羽音高く飛び交ふのを見ます。さて前方には、長き廻廊がありまして、風雨にさらされたる瓦の色面白く、欄間に掲げられた奉額の色亦愛すべいです。中央なる朱色二層の樓門をくぐりますと、今度は稚子殿です。これは白木造りですが、しかし今は中々雅色豊です。拜殿は十三間の丸柱、殿宇高く蒼穹に聳え、形態色調亦頗る佳です。本社は數十階の石段上にありまして、彫刻等美麗精緻なものです。

此外又、俗に百段と申します百の石段を杉樹の影を踏みつゝ登りますと、こゝは眺望頗る佳、近隣郊野一眸の下に集りますこゝにも亦、丹塗の一社があります。此外大歳御社の神曰く何曰く何と、重要建築物の数が、總て十棟程あります。何しろ徳川家指揮の下に出来たものですから、たしかにけち臭くないのです、そして又、久能山以上です。

僕此夏五日間此社に寫生いたしました。當地山本氏は、極めて熱心なる寫生家ですが、淺間に關する寫生、百點以上はされたいふことです。此一事も、いかに畫趣に富めるかが推測できます。諸君或は來岡の機を得給はば、一たびはこゝに、彩管を洗ひ給へ。

\* \* \*